

# 山桜の里 戸赤

例年になく色濃く咲いた山桜。見頃は五月二日から六日ごろでした。開花期間中は二千人以上の来訪客がありました。三、四日のイベントは好天にも恵まれ、地域総出のおもてなしや出店販売で、冬の眠りから覚めた村は活気にあふれました。



連休に満開となる

何日も足を運び、朝早くから光のあんばいを待っているカメラマンもみられました

## 第11回やまざくらまつり



この日のためにも凍み大根など準備していた



「町観光協会事務局の案内でこの日を選んできた、ちょうど良かった」と喜びの声も

色濃く  
村がにぎわう

手打ちそば、つきたてもち、こごみやしいたけの天ぷら、ますの塩焼きなど、開店準備をはじめるとすぐにお客さんから注文の声がかかり、大忙しのうちに二日間のイベントが終わりました。打ち上げ会では特にお手伝いいただいたスタッフへの感謝とともに、それがなかったら大変だったと早くも来年へ話が集中し、接ぎ木で山桜を増殖させる事業も再開したいと意気が上がりました。

限定販売品に益々人気上昇  
花豆パイは一目目で完売



【木地の学習No.43】セヶ岳山麓のブナ林 木地材としては、通称「六種の木」として、惟喬親王から許可されたものであるとする地方もあるが、その地域の植生や社会民俗性の相違によって使用される材は、まちまちであった。一般的には、広葉樹はほとんど使用することができる。針葉樹は適さないものが多いが、ヒノキは比較的よく利用されている。古くは奈良時代の百万塔の塔身部がそうである。古代においては、ケヤキ材の皿が多く出土しているが、「木地材すなわちブナ材」といわれるほどのブナ材が出現してくるのは、中世になってからである。会津地方では、材質的にケヤキを第一とし、ついでトチ、ブナの順とし、価格もそれに準じている。ブナは大径木になり群生することから大量の需要に応じるのに適しており、当時挽物の主流をなした食器碗の材としては最適であった。木地師は初期には、若松や喜多方の供給地に近いところにいたが、ブナ材を求めて移動を続けるうちに、供給地からだんだん遠ざかってしまった。しかし、やみくもに移動したのではなく、製品の搬出、運賃等、経済的収支のバランスのとれた範囲内での移動であった。若松から二弊地、そして会津赤引山山麓へ移動した木地師集団が、次に目をつけたのが、無尽蔵といえるほどのブナ林が広がる針生セヶ岳山麓である。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

5・4民友(全県版) ↓



つぼたて祭チラシ



倉水「春まつり」5・3〜4 ↓



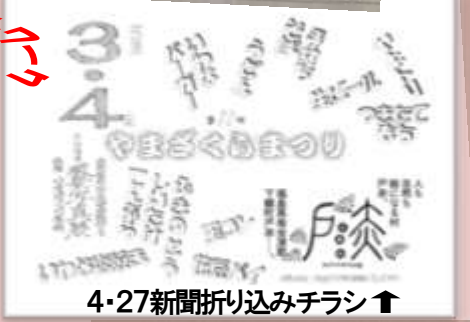
5・9民報全県版 ↑



5・5民報全県版 ↑

倉水に王道ネット

やまざくらまつり、祭、かたくり、春まつり、つぼたて祭と5月連休は戸石川筋の見どころが集中しにぎわいました。大内では観光客を戸石川方面に案内してもらいました。



4・27新聞折り込みチラシ ↑



5・9民報全県版 ↑



かたくり祭のチラシ



(ストーリー性のある村づくりのために【No.13】・紅梅前宮 ある日山から出てきた猿が、何としたことか生まれたばかりの愛児をさらって行方不明になってしまった。産後間もない姫は、悲嘆のあまりつい沼の中に投身あそばし敢えなくなり、お供の姥も驚き悲しみ、御後を慕って飛び込み、あわれや相ともに息絶えてこの世を去った。その後、ある日長沼氏の家臣某が狩猟に出かけてこの地に来たところ、沼のほとりで猿が幼児をもてあそんでいる有様を見て、たちどころに猿を射殺して稚児(おさなご)を奪い返し、我が家に連れ帰り、蝶よ花よと養育するほどに、天声高貴の麗質が磨きぬかれて、ひなには稀(まれ)な美女が成人した。そして、長沼家の若殿に望まれて、奥方として輿入れし、幸福な日々を迎えることができた。一方、里人らは、哀れなかつらぎ姫たちの御霊(みたま)をなぐさめて、その由縁の屋敷に姫宮神社を建ててお祀りしたのであった。「下郷町史-第5巻民俗編(発行・下郷町)」より出典(続く)